



第二 可羅橋慢事

或人のく人世あり皆橋慢と先とてよく秘
俊なるい少くありい自由の方とてをさるる
と是我涯分とけりはけりもかき身をかき
やいあもくるまはくらんじ侍軍とてはくる或
偏執の方とてのこる也是に我らの事は
みどく志く人のつとをうと用ざるありあり
のえらるゆりまはる思ひむらそのつと
おいて人々おせしとてわたり或は打
入鳴呼あり是にゆりよるれりておいて





乃之く見んにありく答こたえりく身みはまりても
 よくけ橋はしをばとと身みとけりしどりやんりり
 文集詩云

木き鷹たか一いつ篇ぺん須す記き取とり
 致ち身み材ざい不ふ材ざい同どう
 やありは是こ方かたり又陸りく士し衡けいが加文ぶん賦ふは
 在あり不材ざい之の質しつ 處こ鷹たか之の善ぜん鳴な之の分ぶん
 之の又また若わか系けい馬ま茂しげが長句くよし

昨日山中之木材取捨已今日庭前之花
 詞慙於人
 三 じや人の公おまごわらぬうみそけのる滄浪乃

水は沈む世の政乃きじくぬといひて首陽の
 入一人あり是諫しむを死せいで退くべし
 をもく退くる難也其性寒氷より潔く懐寵
 尸位の喻をさるるなり
孝臣諫論章云三諫不納則奉
 身以退有臣正之忠無阿順之
 謂之尸位見可退而不退謂之懷寵
 詩一 志ふるふ橋倚平が詩一

楚三回醒終何益 周伯夷 飢未必賢
 といひても孤何よ志さうつぬ振舞とそまうい
 ずや賢才よあはれと若る人せり之ゆどりんや
 う賢く恐れけしむとものさやとてまうくた

あやがみりてりもくがゆりも也小野小町が
 ち好くしつてなされし者さはあはれちうとく
 衣化しつ物よの三宮立帝れ妃も漢王周公の妻
 もいざ此れぞりさるさばと書さうううとあは
 衣は錦繡の敷をさるる合ふは海陸の好狐洞
 身よの蘭麝と煮ドクは和奇と海でてうら
 男は賤くのもおの女清けりうらをうけし
 不ふ十七と母は先い十九とて父めとくれは
 ぬくあやうりもたてて才をさるるうら
 孤兵頼乃独人よ成くるものじうさううと

清きく人目くは井くくくくれやちかろのくから年くく
とくれつておどけくろきくくくくくくくくくくくくく
家へ中づれて月のしろくくくくくくくくくくくくくく
遠のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
帝秀くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
佳くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

④文集一考の古宅のゆくへ驕ハ物乃盈る也老ハ

穀の終つるりくくくくくくくくくくくくくくく
奈くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
呉王夫差乃姑蘓臺秦始皇帝の感陽宮たぐり
をまけくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
て子孫つてふく事ありくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

彈吳滅兮有荆棘姑蘓臺之露
暴秦衰兮有虎狼感陽宮之煙
片々
中くくく唐太家清附魏徵德政くくく
くく詞く

焚鹿臺之室衣殿阿房之廣殿懼危亡於
後宇思安處於早宮則神化潛通無為而
治德於上也

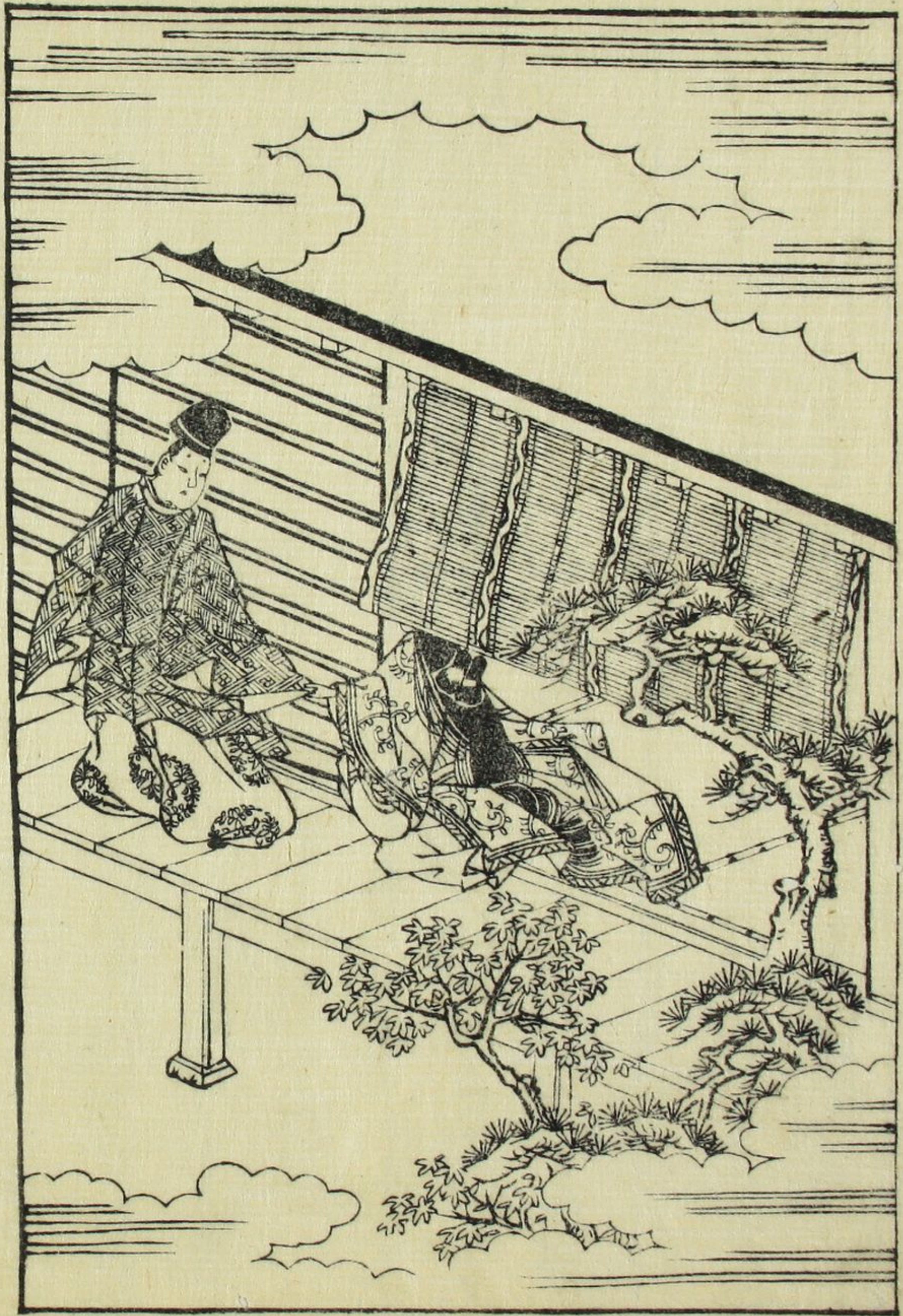
此のわらうる狐貞觀政要に書れりるこせ倭俗の政
有べきやうのみどくめでぬくれ此の帝道乃一事
み所は唐人振舞ふむるゆで此の狐もてとまり
廢臺阿房殷紂秦皇二世未の宮室より五千の
上慢ハ佛はたも何もしもは釋尊乃は華と
從多いし内府狐まき退るうくれ衆根深重れ
増上慢ありていまご證せざる狐蛇とるとやい未

得狐はるりかたのいひのぞく失あるもがやまは
うの経は從り不修は丘いあつらものたふ我深教
汝多不教狂悖と唱く枝木瓦石をよよく忍罵言
設言狐もどがずして終よ其證を得多いされい後
世菩提のよあつらどおらるるを狐新るべと也

第三 不倫人倫事

或人云人をあはばる事の色うらねどもありま也
わろいへ貪して賤をも憐らわろいへ不足るる孤も
憐らわろよとほるる孤も憐てするもいふもをも
さびらうにせとせしりあろいひもてしはくも
あまづりたるこ不運なるものをいふ事ありよの
らぬやうぬねといり申さまよのい摺舞するもつら
ぶらぶらつり是の無智の人なりま也これより
ていふ事いふ言いふこといふ事いふ事いふ事い
やぶぬあはばるるつらぬ事いふれしていふ事いふ事

辱がゆき事いふわいしてつらほどもいふ事い
ふれぬ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事い
たり孤兒寡婦ありともあざむくつらぬ事いふ事
文の女孤位いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
⑤和泉或部保昌の妻として丹後ぬらぶらぶら
系し奇合わらしるるふ小或部内侍奇しるるに
ましくよらるる孤兒中細言をいふれて小或部
内侍つらぬぬ事いふ事いふ事いふ事いふ事い
まらるる事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
はらぬ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事い



おとよぶる直衣の神祇のつく

大空のくねるのをきくはいゆてふみとるはわすれ格を
 やしとるくもくまのやのばよわさあててこいつくうら
 中やのややどくうらいつて返奇はも及びど神祇とい
 とねらてあげてまきうら小太部これより奇よんのお
 小やがえおとるくうら是いうらはうをそて櫻運は事
 むれども彼郷のゆははこれかどの奇を今後か
 らぶとさなはちつ終ざりけりや

⑥ 匡房のりつとりとされ舞人して門裡よりうら
 むらとくうら孤さる情をなれば女房達あはばりて

みよのこひめよびよせく思ひ残るをいふとて和琴
松とあしかりたれはる房とりのしあふと

相板の園中おれしきまきぬいのあまねくもまはるり
如房をくくしえきぞ中んくう和琴松いあづまろ
あしかりしやま

⑦二条殿より南^{こま}条殿より東^{ひがし}の^{きん}位^の亭^の也
三位^の也と後^{のち}年^{ねん}以^{もつ}て月^{つき}乃^のあつた^{あつた}和^わ琴^{きん}と
おれ松^{まつ}松^{まつ}志^しの^のび^びてが^がく^くた^たあ^あつ^つま^まう^うて^て月^{つき}松^{まつ}と^とあ
まづり^{まづり}の^のあ^あま^まを^をり^りを^をり^り方^{かた}よ^よ或^{ある}人^{ひと}月^{つき}いの^のぢ^ぢる^るお^お人^{ひと}様^{さま}
と^と誦^{よみ}し^しく^く人^{ひと}と^とお^おま^まと^とり^りく^くを^をび^びく^くに^にあ^あり^りあ

くれらる中^{ちゆう}の^のく^くれ^れか^から^ら菫^{すず}の^の中^{ちゆう}に^にお^おり^り尼^にの^のよ^よふ
あ^あや^やあ^あた^たら^らる^る菫^{すず}め^めさ^さら^らは^はけ^け後^ご松^{まつ}を^をり^りに^にお^おら^ら
今^{いま}更^{さら}れ^れ清^{せい}遊^{ゆう}い^いと^とく^くあ^あま^まと^とて^て後^ご松^{まつ}と^とあ^あり^りに^にお^おら^ら
ぬ^ぬよ^よ此^{こゝ}詩^しと^とあ^あら^らぬ^ぬ耳^{みみ}に^にも^も僻^{ひが}事^{こと}と^と詠^{よみ}れ^れゆ^ゆに^に
ま^まよ^よら^らか^かぞ^ぞま^まく^くゆ^ゆれ^れと^とり^り人^{ひと}こ^こり^りて^て興^{きよう}あ^ある^る尼^にの^の
あ^あい^いぢ^ぢく^くの^のま^まら^らま^まい^いと^とり^りの^のま^まら^らら^らぞ^ぞあ^あら^らと^とり^り
さ^さし^しど^どあ^あま^まい^い月^{つき}い^いあ^あの^の樓^{ろう}の^のあ^あら^らる^るま^まら^らら^らと^とり^り
い^いの^のあ^あら^らる^るを^をあ^あら^らと^と位^い殿^{でん}い^い詠^{よみ}れ^れど^どま^まい^いと^との^のま^まら^らら^らと^とり^り
ま^まら^らら^らと^との^のあ^あら^らる^る也^也と^とい^いふ^ふま^まら^らら^らと^とり^りて^てあ^あら^らと^とり^り
あ^あら^らら^ら思^{おも}い^いし^しと^とて^て人^{ひと}を^をあ^あら^らづ^づら^らよ^よは^はあ^あら^らと^とり^りも

ころふやむらじのあはれそとてはげとそくはる
 つよたごぬちくおいつんと飛あがりたり
 ⑩ なる海まはしる女房の清水はあつらつたのれ
 ちりり色白くみりり尾のりものぶく疲れりり
 とはが物あそ物あつらりりりりりりりりりりり
 まる方惟の上よこの女房の清水はあつらつたのれ
 そのあつらりりりりりりりりりりりりりりりりり
 まる方とそくはる女房の清水はあつらつたのれ
 の海まはしる女房の清水はあつらつたのれ
 こをまはしる女房の清水はあつらつたのれ

ころふやむらじのあはれそとてはげとそくはる
 つよたごぬちくおいつんと飛あがりたり
 ⑩ なる海まはしる女房の清水はあつらつたのれ
 ちりり色白くみりり尾のりものぶく疲れりり
 とはが物あそ物あつらりりりりりりりりりりり
 まる方惟の上よこの女房の清水はあつらつたのれ
 そのあつらりりりりりりりりりりりりりりりりり
 まる方とそくはる女房の清水はあつらつたのれ
 の海まはしる女房の清水はあつらつたのれ
 こをまはしる女房の清水はあつらつたのれ

三 〇廿

法花傳を
新せしめ

①大魚の重達四女一人づつづきてる婦人ありたりん
行内四石川郡也とせりたり家さい練の並重なり
とて務りへんべりとのかみ経営してよれじりり
まど取あしてあれたり日りのまじりありたりを
一人 後處に去 止観を取めて後一たりありこれ僧より
事何文ふく同くれば止観とて文也但四重よ非
とてつひにわかれかたねくつりありて此之止観天
名智者説已心中所行は門と志のびやん説し
くればこのつれを重達より取あふまじりてや
ぬりり此傳へりやと傳ありたりが世間よゆらして

無骨
無風流

縁よふれてこのあよとめりたり
②近來家勝光院小梅よりあるまゆ人はとある
女房一人物敏の色にきくずみく新張る程より男
法師をどおしねく入るとればらあやあひん
帰あくる張きつるすまふのこおあめさふと
すけらるをさくくつして
新張るをさくくつして
と連弁をさくくつして
かよはるをさくくつして
や付たりたりとく初くあげたり此女房は後成



郷の娘とていみじき奇事なるとけうぐふく姿
 をやうくさうりくふとぞ
 十三 権編刻性士季親といふもの有りきり周易性士
 して其道世にゆがえ者きれど日月の方をさる
 間えをりたり或文亭の徳句の府よらとさる
 けうめ沈淪とさるる其の中に家々の儒者あり
 くらが足ぬあをだりくらりけうるや閉口後来客と
 上るといひくらりくらいば季親合陰先達儒とぞつを
 さるとくらめりていふものありとさる
 十四 鳥羽院法相撰節の後中純言長實の

最手
力士
大空

のし能勢将守^{ねんせ}侍遠^{えん}とし相撲^{すもう}息男^{いきお}侍成^{せう}と具
して素よりさうぶさ方へ先入る酒をぐすしめらるに
弘光^{こうこう}とし相撲又本因^{ほんいん}あつて弘光^{こうこう}とむくは及
間弘光^{こうこう}酒^{しゆ}の初^{はつ}出^でとわすりにまゐる乃^のはよ向^{むか}て
尸^{しかばね}近代^{きんたい}れ相撲^{すもう}の勢^{いきほ}だに大^{おほ}く成^なれまはたぢぢか
ふとも終^{はつ}りりるのまはれまゆりうらめりしうは
雌雄^{しゆうじゆう}を交^{まじ}して勢^{いきほ}終^{はつ}あつて終^{はつ}つあて昇^{のぼ}進^{しん}
ともけうりまうりあつて侍^{せう}業^{ごう}只^{ただ}弘光^{こうこう}あつた世^よの
人^{ひと}これとゆりま近代^{きんたい}いさみさた世^よにもゆりれ
や尸^{しかばね}侍^{せう}遠^{えん}少^{せう}一^{いち}居^ゐるあつて是^{こゝ}にいとくよ侍^{せう}成^{せう}が

ま弘光^{こうこう}尸^{しかばね}侍^{せう}成^{せう}不肖^{ふせう}の身^み今^{いま}度^{たび}とぞ小^こ卒^{そつ}ふれ脇^{わき}と
ゆるされぬ海^{うみ}とん尸^{しかばね}侍^{せう}成^{せう}とつのが終^{はつ}がさく但^{たゞ}
ことと見^みえぬ尸^{しかばね}侍^{せう}成^{せう}弘光^{こうこう}あつた世^よとぞ道^{みち}
程^{ほど}のどとあ弘光^{こうこう}尸^{しかばね}侍^{せう}成^{せう}也^{なり}哉^やらまゐりいさつといさつと
たの弘光^{こうこう}出^でして弘光^{こうこう}とつ弘光^{こうこう}侍^{せう}成^{せう}神^{かみ}と合^あひ
畏^{おそ}る弘光^{こうこう}尸^{しかばね}侍^{せう}成^{せう}とつ弘光^{こうこう}とつ侍^{せう}遠^{えん}くゆれ
尸^{しかばね}侍^{せう}成^{せう}弘光^{こうこう}とつ弘光^{こうこう}とつ弘光^{こうこう}侍^{せう}成^{せう}
が弘光^{こうこう}とつ弘光^{こうこう}侍^{せう}成^{せう}がたつとつ弘光^{こうこう}とつ弘光^{こうこう}侍^{せう}成^{せう}
ぬんと身^みをさうとつ弘光^{こうこう}とつ弘光^{こうこう}侍^{せう}成^{せう}とつ弘光^{こうこう}侍^{せう}成^{せう}
そつ弘光^{こうこう}とつ弘光^{こうこう}侍^{せう}成^{せう}とつ弘光^{こうこう}侍^{せう}成^{せう}の方^{かた}はけそつ

めうんとするくまきりて淋るげよんてくれが今いさば
 くるもていんと伊遠りくれに放らくり弘光りくもれ
 む合のさのこせは侍と猪負のこれよるぶうらと一
 さく二内はうらまうるべしとておくれの方へを
 よらそ二乃神弘引らぐ禱のすそ弘光りくもれ
 ぎそをへあゆみ出て是へやりゆくこり侍成の
 目くけあぐり畏ておくれ弘光りくもれ
 早ゆりやりて一内は侍るべしとて侍成りくもれ
 の方へてこりおくれとてをへやりゆくこり
 抜勢勇力鞍人鬼王の飛あつれ力士のきりす
 け

本とゆがゆ弘光款といとるれいんらぶとてんえくる
 せそとていりち弘光とて徳人目弘光りくもれ
 さがてげあれたあつらわぬ侍成がしよりて弘光
 が弘光りて希さゆつとて弘光りくもれ
 びぬのりかた来流を弘光りくもれ
 てくれいわやまら也今てなつとて弘光りくもれ
 こより侍成る弘光りくもれ
 と侍成る弘光りくもれ
 又弘光りくもれ
 け

いぬさばりありておとわづらて馬帽子のサリ
とて入る申のまよひはなづとそをなげぬありと
らがりて君乃見素の今日むらみくひとせけつま
てやぐくもむらまきりてぐりは皇女事ここし
あつれつと後俊さげもつとこも脇をふ昇進
志わるもの成に公家さ成くやく雌雄と交され
ど何況わさるれ勝負狼籍乃つりなること作
らまきく長實に涉氣色公もつざらとくり

⑤丹後守保昌任團下向のつれよとねふり
白髪の武士一袴わらりくり木下下にくら入て

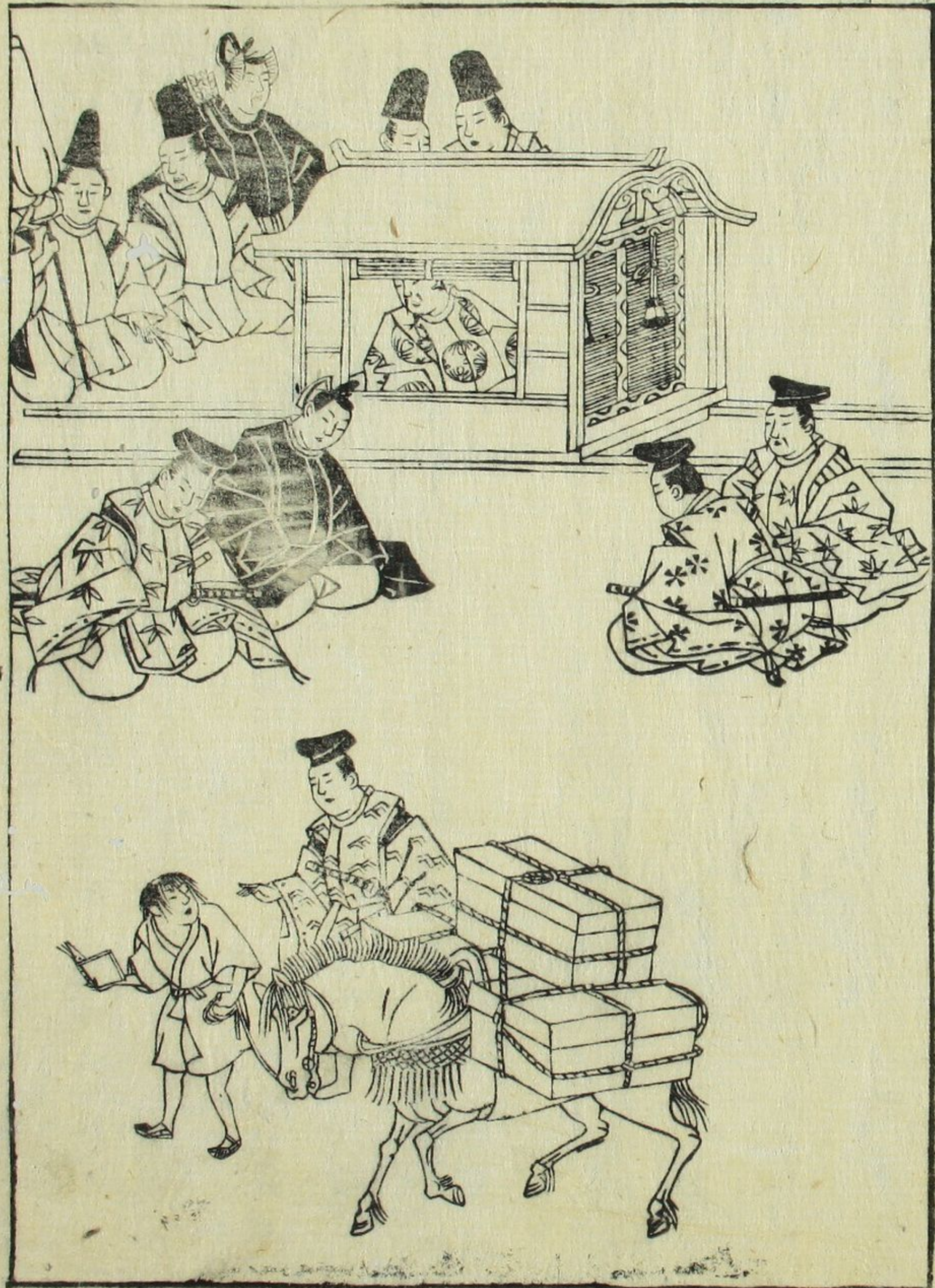
とくくふけてまきりける成團司の郎将云此を義何
不下馬哉奇怪ありとぐりやれとぐりといふ家一團
司乃云一人高千れ馬の立やうありやとものよわは
やぶぐらびと制止してぐらるる間三町むらりはぐりて
大また赤門射致経牧多の役敷と具してあひより
うろろろ成して團司よと云然間致経云家内を箱や
一人あひまうてけつとんのれい愚又平又たまうて堅
固乃田舎人そと子細成さげはぐりてとれとあ
はしつとんとといふり致経さくは團司されをせ
致頼とてやまらりといふまらけ黨の頼信保昌

維貞衛公雅 致公雅頼公雅とて世世は掃掃きつる四人四人は武武もたぬ虎虎を
 うとたれいとも死死きばつらうもは保保昌昌くれば振振蘇蘇
 をとんかしくいふあづは師師をたぬいそめてまわぬ
 くりつみやまきもぬも弘弘元元一一似似たりたり

⑤昔昔漢漢高高祖祖と楚楚項項羽羽と秦秦の世世はわくそいしつ
 わまこの合合戦戦といふまじりてはぐあつてつゆま
 項項羽羽とあつがして天下天下とさわりしわふ黠黠布布とま
 小小たけなよそひて事事者者多多るぬあなげりてまづ
 であまつわぶなむれまぬあつて失失たひまう何何
 方方につまそい人をばあかばつゆどさありすんで賢賢

人人も万万慮慮一一失失わり愚愚あるものも千千慮慮一一徳徳有
 此此千千グアれ徳徳公公習習て彼彼万万グ一一乃乃失失公公のぐら
 これよつて智智者者の空空門門を破破とて聖聖人人萬萬葉葉よ
 いろこつり此此さうりい吉吉人人の人を擇擇ばつてあ中中
 貴貴ものかす物物公公同同学学ぶつらう公公取取りやぬまりぬり
 黄黄帝帝の牧牧童童の詞詞と信信し徳徳宗宗の農農夫夫のいそあをそ
 入入結結くる街街談談卷卷祝祝のまらぬくぬととらんと
 あつとつら

⑥村村上天上天皇皇のそりい中中さほろされ人人れ事事むと先先
 て延延表表の先先帝帝と畜畜世世のつらあるかりりりり同同を



結ひなればおそれねがえけるやけふめかふる事
 らばとつみく畏るころけまじおがくすむいねあつて
 清くさるゝあちんかぢの事あつたにまじりて
 るに作下された終つるの事何事ともなしに
 けらあしひりどゆるふあ世よは除目おとるるに
 續ねのいさう入場ちゆうぞおがえゆるおとまり
 けまじみく清蔵おとまりとて司取の事おとまり
 てよくおがく先く定る終つる

①六 清堂園白物おとまりけらあ道よ荷負馬の先く
 ちゆう小童おとまり文をさげくよとるるとわやし

功なりてらくくせりよせてゆくんぐれば眼よ守時自
多のつらく賢と相のたつられどやがてりて道徳よ
はもて学文とせむおられらるるやふ後よハに時棟
とて廣才博覧の文士ありけむば君よりはて性全
乃道をはきり養生の方とて人けしむ多考の
人より衆

①丸書寫性空と人生身の普賢と見ても人といよ
寤寐より清しといふるふ或教精経よりけられ多経
をふむらやぐら賜息よよとくりて志ばしまらるる
くら及よ守身の普賢といふもんと志りて神妙花

女の長者狐のくぐらよ由とて及らるる奇異のさしと
かしてかゝるけりして長者が影よゆらつとされい
只今及らりよ百の軍とて好妻礼舞れ行也長者
よこ府よ居く靴と打く礼拍子の法身とくらるるの
詞いらく

周防じろは中なるみくす針も風いふうねも
はら彼をうつとと人用始して位作恭敬してよこ
めもつらとゆりののさあつらびとれたらま地り
普賢并の形よ現と六牙の白象よ高て眉向乃
ひくろ狐もあつて道俗を穢男女とてくは即微妙

の音聲をききして實相を漏の大海に五葉六欲の
風いふるのども隨縁をぬれ給乃ちすぬ何事かと感
涙かきんぐりて眼をひらいてみれば又そのおどく
女人乃ちすがごとく成て周防しらすの須臾もと眼
をさぐるるとたいた又茶のこらと現れて法門を演説
すふかくおどく度く教れしてななく帰く毎ふ何
長者ふとるれ所成を困道よりと人の行へありて
けりしにわぬ不可及といひて即儼然と死と異香
をきよとらしてそれこそ香し長者の杖滅乃同極楽の
奥とありて悲泣とる来り給うをよと人ゆとく悲

涙を洒らして帰路をゆぐいかりとるを被長者女人
好色のきとひさればぬれり思成持去の化作といふん
佛赤れ悲教を生化夜の方使ふよりそらとてさほ
くはかて去るなり給う道すがら賤まのうらぶら来
りぬるのきとひしてぬれり世を人のま智の人もり
は文いしてまらまをひとて惠心檀那の信心をどおし
ゆして信果の縁覺の佛ありいひるかたとされたる成
到ふもいふぬららぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
くはは法門をゆはしてそを惠眼の開く来りてはと
るの田舎よいらどとて来りぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ

とくくちのけ門ハ普賢のせくくゆて解脫せしめ給
ふりといふ内惠心故致乃せしむはほむれ給て檀那
ぬ此をかりしとせりてしりてしりてしりて

真金像

身色如金山端嚴甚微妙如淨琉璃中内現
と伽陀を誦して世が体もくろり行基并大和泉國乃大
鳥の里よすもん弘は大師の後成國多度郡よりか
まより皆是る多郡の民間とてなれどもしりてしりて
く持老れくみぬわいし多り吉備とたいた東門射
圃緒之子也粟田た大たの想る守りれが息りて

二人あり其又婿しけきども才敏と愛さく終りくば
大才のやじごくれと官小なるに後漢書云

胡廣累世之農夫也伯始致位公相
黃憲牛醫之賤子也叔度動名京師

あるのちの傳説が殷宗乃姜中い今志速み民
をりて舟に舟名尚が周文れ東のたふまゝ一即
世に治ふ器とてむれと賤むれ身きりとい
ども誤く補ゆいりり賢才りりりりゆんちり
一系院序製云

殷帝詔嚴郊野月 周文禮厚渭陽風

所貴是賢才といつるは彼二人よきく作らば
つらかり虞舜の雷澤の漢父なりとれは後帝
位一のかり寧戚の牛口れ足者なりとれは國政に
む柴紂たりとも頼岡が中身は非なりといつる
賢愚とあらはるる人なり旁人を志すはあはれ
とてさうりやを愛するべしとせがえりといつる
よふなるものとまゝおこつてはさういふて詞乃
とく又其人よめばと其官はあはれを小人と
りり小人は官あはれとせりく爾らるはさういふ
はくは累世清純の人なりといふ是等の及ばざらん

人は氏を継ぐべしと人なりと年なりといふは
才のあはれ短といふは又道徳あるは君子と道徳
あはれ小人なりといふは又短國のまぢりといふは
あはれは此のあはれなりといふは又短でまを智者を
とていふは一篇の作らばはれはあはれといふは
あはれは成りてはまぢりといふは又人倫のまぢりといふは
あはれはまぢりといふは又漢家の國王帝運は
あはれは神はさういふと退き我朝の運は
天の鉄をいふはまぢりといふは又廢人の身はあはれ
まぢり

